

まちかと羅針盤

1998. 3. 24 日経新聞

● 花博きっかけに改修 環境に優しい町に

西三荘ゆとり道（守口市）

大阪の東北部に位置する守口市は、東海道の宿場町であり、江戸時代には大阪の玄関口としてにぎわった。この東海道（京街道）は現住の京阪電鉄守口駅の北側に位置する、文禄堤の上にあった。文禄年間、西国の毛利、小早川、吉川家が携わった淀川の大改修に伴うえん堤の付け替えで生まれた、伏見城と大阪を結ぶ二十七キロの道路だ。

戦後、この地理的な利便性に着目し、松下電器産業、三洋電機という巨大家電メーカーがこの地で事業拡大の基礎固めをしている。

日本が高度経済成長を遂げていた六〇年代、守口市はベッドタウンであると同時に、松下と三洋の協力工場の集積地として脚光を浴び、多くの関連企業がこの地で創業した。当時は日本有数の工場集積を誇り、全国に家電製品を出荷していた。しかし、住宅地と工場の混在問題と、都市環境の悪化、特に西三荘用水路の汚染は深刻だった。

改修に着手したきっかけは九〇年に鶴見緑地で開催した国際花と緑の博覧会の北側出入り口整備事業。水路を暗きょにし、花時会場となる鶴見緑地への二百五十メートルのアプローチに仕立てたのである。その後、特徴あるゾーンを整備し、長さ一・九キロの「西三荘ゆとり道」が九七年に完成した。

松下と三洋の企業城下町、守口は進取の気性に富む地域だ。一例が全国に先駆けた環境に優しい町づくりだ。守口市は下水道普及率一〇〇%、都市河川の修復、駅前再開発など厳しい財政事情の中で二十一世紀をにらんだ生活文化都市への脱皮を試みている。

（関西大学教授 大西正曹）